

復興支援異分野連携プロジェクト 「イベント復興支援部会」「観光復興支援部会」
復興国際博覧会構想会議(各々が考えるイベントや施設、集客を EXPO 誘致で連携)報告書

開催日時：平成 23 年 9 月 14 日（水）17:00～19:00

開催場所：秋葉原 UDX 4F UDX オープンカレッジ

参加人数：参加者数:28 名

【会議概要】

復興支援異分野連携プロジェクト会議「イベント復興支援部会」の中の第 3 回目の会議。第 1 回、2 回目は「花と緑の街づくり、グリーン産業ソリューション及び国際復興花博」として開催してきた。今回は「復興国際博覧会構想会議」、緑や花に縛られないものとし、それぞれが考えるイベントや施設、集客を「EXPO 誘致」の枠内で連携していくということテーマとした会議を開催した。今後、基本的に毎月 1 4 日に定期開催し、プラットフォームを活用した意見の集約と「復興国際博覧会」実現に向けた取組みを行っていく。認定国際博覧会を目指すものではあるが、早い段階での復興支援が実現できるよう、様々なイベントや国内博覧会等を組み合わせ、全体として復興国際博覧会としていく。

プレゼンターからは、デジタルでない人の絆や魂、躍動感を伝える「祭」をテーマとした「東北祭博覧会」、若者支援や新しい産業創出を目的とした「ソーシャル・イノベーション博覧会」の提案があった。また、イベント学会における博覧会計画進捗報告もなされた。鎮魂、美を意識した街づくりや風景となる博覧会としたいという提案もあった。

【会議内容詳細】

◆会議概要説明

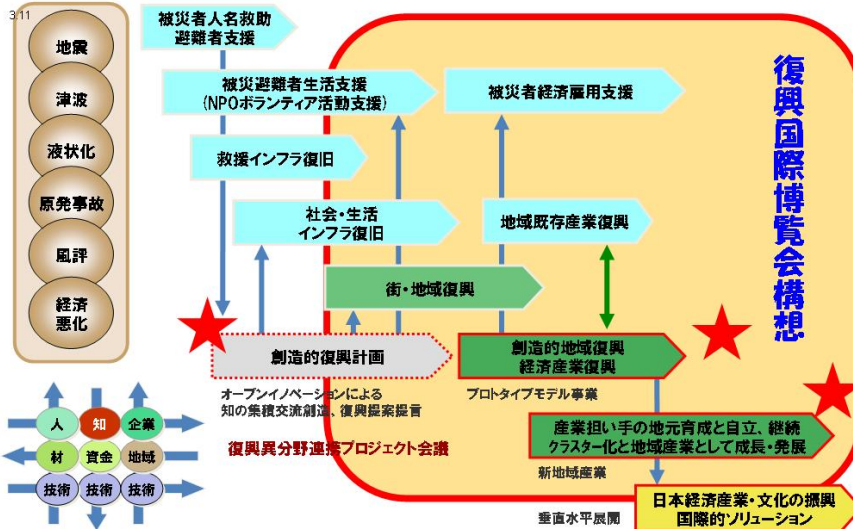
新産業文化創出研究所 所長 廣常啓一

1. 「復興国際博覧会構想」概要

BIE認定の国際博覧会を目指すものであるが、早い段階での活動開始が必要なため、イベントや国内博覧会などを組み合わせておこなっていく。様々な復旧、復興活動を復興国際博覧会と位置づけて行うことにより、より大きなインパクトのあるものとする事ができる。日本経済産業・文化の振興における国際的ソリューションとなる。

復興支援異分野連携プロジェクトの位置付け

創造的復興計画の提言とプロジェクトの導入、継続的な地域復興、産業振興とその自立化



2. 国際博覧会とは

国際博覧会条約によれば、「複数の国が参加した、公衆の教育を主たる目的とする催しであり、文明の必要とするものに応ずるためには人類が利用することのできる手段または人類の活動の、もしくは複数の部門において達成された進歩若しくはそれらの部門における将来の展望を示すものをいう。」とされている。

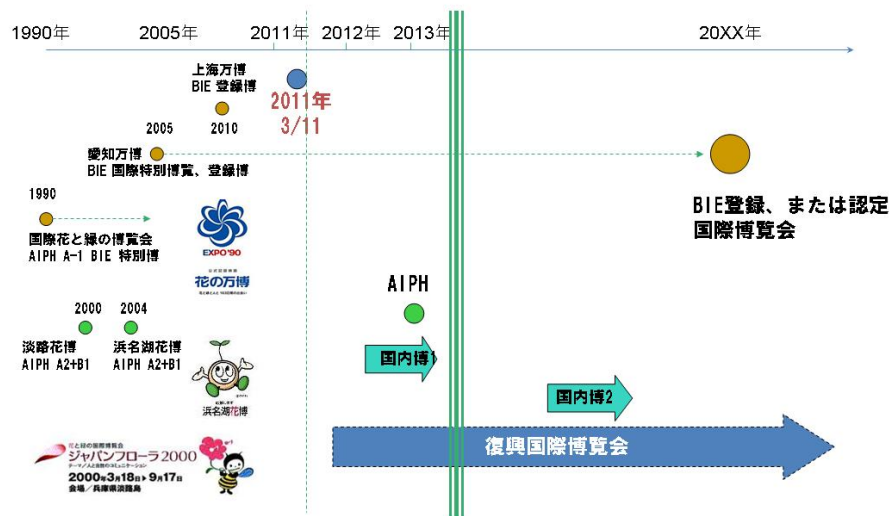
国際博覧会条約に基づく博覧会を行うには開催を希望する政府が博覧会国際事務局（BIE）に申請（立候補）し、総会で承認される必要がある。

国際博覧会は会場の規模やテーマなどから、主に“登録博覧会（登録博）”と“認定博覧会（認定博）”の2つに大別されている（以前は「一般博」と「特別博」に区分されていた）。

国際園芸家協会(AIPH)が認定した「国際園芸博覧会」のうち大規模なものでBIEが認めたものと「ミラノ・トリエンナーレ」でBIEが認めたものは、「認定博（以前は「特別博」）」として国際博覧会と称することが出来ることとなっている。同一国の場合は10年に1回以下の割合で開催することができる

3. 博覧会の組み合わせ

博覧会の組合せ



4. 復興国際博覧会のイメージ

① 種々の組み合わせにより、時間と場所に制約されない博覧会。リアルとバーチャルの活動、事業手法も多種多様、入場ゲートや囲いもないが、博覧会国際事務局（BIE）の認定国際博覧会。

② 復旧・復興活動のプロセスそのものが博覧会のテーマであり、スタート。国際博覧会中は、国際見本市や海外出展作品が出来上がっている。

<国際見本市>

復興見本市、復旧見本市、ボランティア見本市、防災見本市、被災地域の方々思いの見本市・・・など。

<海外出展作品>

この道路はフレンチストリート、この土手の花々はオーストラリアガーデン・・・など。

5. 国際博覧会ブランドによる効果の活用

① それぞれの活動や成果が国際博覧会プログラムであるというインセンティブとモチベーションの効果。

② 異分野の連携促進

③ 企業パビリオンの活用とCSR

④ 国際的のちのち活動と海外参画者への道筋

⑤ イノベーションの促進

⑥ 事業同士の有機的連携促進

⑦ 知のクラスター、産業クラスター、地域クラスターの形成による新産業や新文化創出の動機付け

【博覧会の提案】

◆ 株式会社デヴェューエンタープライズ

「海からのレクイエム『東北祭博覧会』の構成案（たたき）」

東北の祭りを主軸に、日本中（+世界）の代表的な祭が海を渡り、東北に集結・回遊する世紀の祭典、お祭り博覧会。

- ・ 名称：～海からのレクイエム～東北祭博覧会
- ・ コンセプト：日本中（+世界）のお祭りが「船団」を組んで東北被災県を回遊する移動型お祭り博覧会
- ・ テーマ：日本のこころ、日本のまつり
- ・ 開催場所：陸上 新設の海浜記念公園（3県）+市街地全体
会場 海に浮かぶ大型客船（海上パビリオン）
- ・ 事業形態 実行委員会方式 ⇒ 東北祭博実行委員会

◆ 株式会社ソーシャルプランニング

「ソーシャル・イノベーション博覧会」

東北地方の課題として、人口の減少が挙げられる。これは、今回の震災に起因しているものばかりでなく、それ以前からの問題であった。そこで、復興国際博覧会においても新しい産業を作るような博覧会を作って行きたい。そのキーワードは「ソーシャル・イノベーション」。海外では社会貢献的（ソーシャルイノベーション）活動が主流を占めるようになってきた。日本においても、若者がソーシャル・イノベーション的発想で活動することが多くなってきている。そんな若者を応援しながら、ソーシャル・イノベーション博覧会開催の提案をしたい。大阪万博のテーマは「人類の進歩と調和」であったが、40年たった今、ソーシャル・イノベーションを通して真の「人類の進歩と調和」を実現する時である。国際的に人が集まるソーシャル版ダボス会議となるかもしれない。

【イベント学会における博覧会計画進捗計画】

◆ 株式会社博報堂

「イベント学会における博覧会計画進捗説明」

1. 復興博覧会の軌跡の紹介

昭和10年に、大正12年の関東大震災から立ち直った横浜市が開催した「復興記念横浜大博覧会」から昭和41年の「新潟防衛大博覧会」まで、復興をキーワードに開催された博覧会が16件あった。

2. 東日本大震災における「東北復興博覧会構想」の紹介

本研究においては、3つの方向性の検討を行っている。

- ① 三陸復興国立公園整備事業の促進に寄与する博覧会
- ② 国際園芸博、国際博覧会の可能性を並行して追求
- ③ 政府・東北自治体・産業界が一体となったミラノ万博への戦略的参加

具体的には、復興タイミングにあわせた10年継続・リレー方式の地域博覧会、地域博覧会から国際園芸博覧会・BIE認定博覧会への発展、ミラノ万博での政府・東北自治体・民間企業がいったいとなった「ジャパナビレッジ型」の出展を提案していく。

3. 補足説明

イベント学会会長堺屋太一氏は、国だけでなく民の力を活用した提案を行う予定。今後民間企業への呼びかけを行う。また、本日の話以外でも構想を持っている。(9つのテーマ)。少しずつ紹介をしていきたい。

【参加者からのプレゼンテーション】

◆ スペースメニューラボ

「仮設的デザインによるイベント・街づくり」

慰霊、祭り、イベント等をとおして、先駆者であるセドリックプライス氏の事例をもとに仮設的デザインにおける国際博覧会を提案。見た目の美しさも大切。

【その他意見】

- ・ オリンピック招致などと結びつけることも視野にいれることができる。
- ・ 民の力、意見を多く取り入れたものにする。
- ・ ソーシャル・イノベーションの博覧会を行う場合、通常 BIE 申請は日本政府が行うものなので、管轄窓口という意味で課題がある。
- ・ ソーシャルビジネスを博覧会とするとハードルが高い。自分たちで作るという意識の基に行ったほうが良い。
- ・ 国際博覧会を開催するにあたり、新しい価値の提案が大切。(概念作りが大切)。
- ・ 企業が CSR 活動として参加できるような概念作り。
- ・ 愛知万博において、既にソーシャルビジネス的発想はあったが、広告代理店などの機能を考えたときに難しい部分がある。
- ・ どの企業も最近ではソーシャルプランニング的発想を持ち始めている。
- ・ 「博覧会」という名の下に様々な活動をしていくことによって、モチベーションの向上を図ることができる
- ・ 毎月14日に「復興国際博覧会」構想会議を行っていく。

【事務局より】

今回は、「復興国際博覧会構想会議」と銘打ち、会議を開催した。そこには、一つ一つの復旧・復興活動の活動自体が国際博覧会の一部である、というコンセプトが根底にある。復旧・復興が完成する前の活動自身も国際博覧会の一部であり、なしえた復旧・復興作品も、ある種見本市的な意味の国際博覧会の一部となる。その意義はどこにあるのか。スカイツリーの事例から考えても、完成前から話題を呼び、その現場を訪れる観光客の絶対数は確実に増加するであろう。復旧、復興活動を行う人たちも、自分たちの活動が国際博覧会プロジェクトの一部をなしていると考えれば、モチベーションも向上する。また、長期開催となるので、その分の集客も見込め、海外からの注目も長期継続される。

今回の話し合いでは「ソーシャル・イノベーション」がキーワードとなった。誰かがやるのを待つのではない。企業も NPO も若者も高齢者も、皆が主役であり、主体となる、そんな復興国際博覧会を思わされる。技術や知識を持ち寄り、連携し、編隊を組み、新しい

価値を創造する。ここで忘れてはならないことは、地元の力をよみがえらせる「ソーシャル・イノベーション」。プレゼンテーションにもあったように、東北地方においては震災前から若者の地域離れが深刻な問題であった。先日、陸前高田市とスカイプ中継で会議を行ったが、その時にも人口減少の問題が挙げられていた。言うまでもなく、震災あるいはそれによって派生した種々の問題によって、人口は更に減少している。「ソーシャル・イノベーション」による新しい産業の創出、あるいはそのような人材の育成も大切な復興のためのファクターとなるのではないだろうか。